大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

Press Release

取り組み

2026年8月28日

＼AI for Science 時代の研究伴走支援体制！／

D3センターが Research Software Engineer 組織を始動

―研究者と協働する AI・データサイエンス・ソフトウェア技術の専門チーム―

❖ 概要



大阪大学 D3 センターは、Research Software Engineer（RSE）による研究伴走支援体制を構築し、2026 年 9 月より本格的な活動を開始します。

RSE は研究者と協働しながら、AI・データサイエンス・ソフトウェア技術を活用して研究活動を支援する専門人材です。近年、生成 AI や大規模データ解析技術の急速な発展により、あらゆる学術分野で AI for Science への期待が高まっています。一方で、多くの研究者は研究そのものに加え、AI を含むソフトウェアを活用するための業務（GPU 環境の構築・運用、AI 環境の整備、データ整備、ソフトウェア開発など）にも多くの時間を費やしているのが実情です。また、欧米の有力研究大学では、RSE 組織が研究力向上の重要な基盤として整備されていますが、国内では、RSE を組織的に配置し、全学的な研究支援体制として運営している例はまだ多くありません。

このような状況を改善し、研究者が研究構想、実験、解析、論文執筆といった本来注力すべき活動へ集中できる環境を実現するため、大阪大学 D3 センターに RSE チームが発足しました。D3 センターがもつスーパーコンピュータ「SQUID」をはじめとする研究データ基盤、GPU 計算基盤、AI 活用基盤等と研究現場とを接続する「橋渡し役」である RSE が、個々の研究者に寄り添いながら、研究プロセスそのものの効率化と研究成果の質の向上を支援します。これにより、大阪大学全体の研究力強化、および「基盤×データ×AI×人材」を統合した新しい研究支援モデルの構築を目指します。

伴走支援として、具体的には下記を提供します。

・各研究者の研究テーマや課題をヒアリングし、AI フレームワークの選定からデータ整備・分析・仮説検証までの具体的な手順を提案します。

・データ収集のデータ形式とデータ分析のデータ形式との違いを吸収するコネクタ等、AI 駆動型研究の実践に必要なソフトウェアを開発します。

・研究現場で得られた知見を、分野別の AI 活用事例やテンプレート、ベストプラクティス集として蓄積し、全学の研究者に共有していくことにより、AI 活用の活性化を図ります。

・研究データを外部に出すことなく活用できるよう、学内の AI 環境やセキュアなプライベート API、GPU 基盤を用いた安全な研究環境を整備します。

❖ RSE 活動概要

【推進体制】 大阪大学 D3 センター RSE(Research Software Engineer)チーム
【開始月日】 2026 年9月1日～ ※継続的な取り組み
【拠　　点】 大阪大学 D3 センター(吹田キャンパス)
【 対 象 者 】 文部科学省 SPReAD 採択研究者を皮切りに、文系・理系を問わず全学の研究者へ順次拡大

❖ AI for Science 推進の第一歩

大阪大学 D3 センターでは、AI 研究支援、HPC・GPU 基盤整備、研究データ基盤整備、研究 DX 推進及び、学際共創研究支援以下の機能を一体的に推進しています。RSE 活動は、これらの基盤と研究者を結びつける「研究伴走支援機能」として位置づけられます。

活動開始当初は、文部科学省「AI for Science による科学研究革新プログラム(SPReAD)」採択研究者への支援を優先的に実施しますが、これは全学的な AI for Science 推進に向けた第一歩です。今後は支援対象を順次拡大し、文系・理系を問わず大阪大学の研究者が AI を活用して研究成果を創出できる環境の整備を進めます。

❖ D3 センターだから実現できる RSE

欧米の有力研究大学では、Research Software Engineer(RSE)組織が研究力向上の重要な基盤として整備されています。しかし国内では、RSE を組織的に配置し、全学的な研究支援体制として運営している例はまだ多くありません。大阪大学 D3 センターは、以下を併せ持つ全国的にも特徴的な組織です。

・スーパーコンピュータ「SQUID」、研究データ基盤(ONION 等)
・GPU 計算基盤
・AI 活用基盤
・OUID をはじめとする統合 ICT 基盤
・学際共創研究支援機能

RSE はこれらの基盤を研究現場へ接続し、研究者と共に価値を創出する「橋渡し役」として活動します。単なる研究支援にとどまらず、「基盤×データ×AI×人材」を統合した新しい研究支援モデルの構築を目指しています。

❖ 2026 年度の重点活動

初年度は研究者への伴走支援を中心に、以下の 3 つの取り組みを推進します。

① **研究者への個別伴走支援**
各研究者の研究テーマや扱うデータの特性をヒアリングした上で、AI フレームワークの選定、データ整備・前処理から分析・仮説検証に至る一連の手順を提案し、技術支援を行います。具体的には、AI 活用支援及び AI 環境の提供(AI モデル開発支援、RAG 構築支援など)、GPU 利用支援、Python による研究自動化、データ解析基盤整備、ソフトウェア品質向上などを伴奏します。

② **AI 活用知識の体系化**
個別支援を通じて研究現場で得られた知見を蓄積し、他の研究者が再利用できる形に整理・共有します。例えば、分野別 AI 活用事例、研究支援テンプレートの作成、ベストプラクティス集の学内公開などを行います。

③ **安全な AI 研究環境の整備**
研究データを外部へ持ち出すことなく活用できるよう、セキュアな AI 活用環境、学内 GPU 基盤な

どを整備します。

❖ **研究 DX との連携**

RSE 活動を通じて蓄積される知見は、大阪大学 D3 センターが推進する研究 DX にも活用されます。現場の研究者と共に得られる実践知をもとに、論文品質診断／文献調査支援／国際共著マッチング／研究テーマ探索／研究ダッシュボードの作成など、研究特化型 AI サービスの開発を進めます。大阪大学 D3 センターは、RSE 活動と研究 DX を両輪として推進し、AI for Science 時代における新しい大学研究基盤の実現を目指します。